個性と思潮

―元義と光平について―

斎藤清衛

文学の世界において、作者が文芸思潮を構成するものか、反対に文芸思潮が出来て、そこから各作者が生み出されるものか、この疑問は単純に決定しがたい文学史上の課題である。文芸思潮はあたかも一大河流のように、上代から形成され中古・中世・近世・近代と次々に流れつづけて一刻も留まることを知らない。作家の方は急流の魚のように、各思潮の間々に姿を出して、あれやこれやと文芸の創造を果し、その表象の状も千差万別である。特に時代の間隔形式の次第によって、作者の文芸観の上に各種の差違が生じてくる。作者は各々優秀な作品を制作しようと期待するが、社会一般の評価は必ずしもその望み通りにはゆかないのである。万葉集に選ばれた各種の歌は、種々の心境から詠み出されたものとしても、ある臣下が天皇や皇子等尊貴のものに献じたもの、乃至知人に贈るとか、贈歌に和(こた)えて作ったものには多少の自信自負の態度が現われている。しかしその何れもが優秀の作と看るより、次の例のように対話語の表現と同様に平淡の感銘を与えられる例が可なり多いのである。

大伴坂上大郎嬢贈二大伴宿弥家持一歌

玉有者手二母将巻手薄胆乃世人有者手ニ巻難石（和訳―たまならばてにもまかむをうつせみのよのひとなればてにまきがたし―巻四）

これは一の例歌に過ぎないけれど、大嬢(おおいらつめ)は家持の情熱を感じようとして、初めからことごとしく気取った歌詞を使っていない。その他に万葉集に選ばれた歌のあれこれを玩味してみれば表象の心裡に納得がゆくであろう。歌集は撰者の嗜好にもよるが、万葉集では、柿本人麻呂、額田王(おおきみ)、大伴旅人などの歌調は家持の歌などに比較して明かに婉麗味を見せている。これには、年齢の若々しさからくるもの、支那文学の影響あるもの、社会的位置の高かった理由など、種々の原因が推知されるが、人麻呂の諸作の類は後人が嘆美するように果して万葉集に掲載され、文芸の本質を穿つた和歌として、無比の価値があるものか否か。次の一首の類もとより人麻呂の優秀さを示すものであるが、却て「従石見国別妻上来時歌」の長歌に比較して特殊の調子を見せている。

淡河乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思慕爾古所念（和訳―あふみのみゆふなみちどりながなけばこころもしぬにいにしへおもほゆ―巻）

これを要するに中古時代王朝文学は大部分女流の筆で書かれたこと

は、九世紀から十一世紀にかけての新社会思潮に因るといわざるを得ない。紀貫之のように男性の間にも女流同様、散文脉平仮名の書けたものは多かった筈である。むしろ口ことばでの表現であるから、筆を走らすに容易であったとさえ思われる。しかし伝承されている限りにおいて男子の作と看られるものは甚だ稀であり、傑作と考えられるものが殆い。これは後宮に女流が勢力を持っていた結果のみとは考えられぬのである。

栄花物語や大鏡の筆者は不明瞭ながら、ほぼ男子の筆と察せられる。その執筆の動機についてであるが、栄花物語は過年体に依る藤原道長の栄花の歴史である。従って宮庭、藤原氏の背後を伝紀体本位に筱述したもので、中世の鏡物と並べて問題の提供が認められる。次に大鏡の五十六代（清和天皇）条の筆致を引例すると、

つぎのみかど、清和天皇と申けり。文徳天皇の第四皇子なり。御母、皇太后宮明子と申き。太政大臣良房のおとゞの御女なり。このみかど、嘉祥三年庚午三月廿五日に、母かたの御おほぢおほきおとゞの小一条のいゑにて、父みかどのくらゐにつかせたまへる五日といふ日、むまれたまへりけんこそ、いかにおりさへはなやかにめでたかりけんとおぼえ侍れ。このみかどは、御心いつくしく、御かたちめでたくぞおはしましける。惟喬親王の東宮あらそひしたまひけんも、この御事とこそおぼゆれ。

文中の「御かたちめでたくぞ」云々とあるは、帝王編年記の「風姿甚美麗如レ神」と出ている句の暗示でもあろう。漢字仮名交りの文であっても、「伊勢物語」や「源氏物語」やと何となく風格を異にしている。王朝時代もその末に近く文体が変って漢字熟語を巧に使用するようになった。群書類従の文筆部の中に、「都氏文集」（都良香作）「田氏家集」（島田忠臣作）「菅家後草」（菅原道真作）「江史部集」（大江匡衡作）等が篇纂されていることは類従読者の知るところであり、各文集の内容も多様であり、文体もこれに応じて別れている。

白楽天讃

有二人於是。一情竇虚深。施レ紫垂レ白。右レ書左レ琴。仰飲二茶茸。一傍依二林竹一。人間酒癖。天下詩淫。亀児養レ子。鳩老知レ音。治二安禅病一。発二菩提心一。為レ白為レ黒。非レ古非レ今。集七十巻。尽是黄金。（都氏文集）

讃文であるから、必然に辞句が流麗になってきたのでもあるが、中古、李杜の詩と並んで盛名を讃えられた白氏の詩集の美を採りあげたものである。「富士山記」の筆頭は、

富士山者在二駿河国一峯如二削成一直聳属レ天。其高不レ可レ測。歴二覧史籍所一レ記。未レ有下高二於此山一者上也。其聳峯爵起。見在二天際一臨瞰二海中一。観二其霊基所二盤連一。亘二数千里間一（下略）

となっているが、要するに文句の使用、表現の方法に一大変化が認められるのである。

これらの文体は、たやすく「将門記」「陸奥話記」類の漢文の戦記物だけでなく、「保元平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」などの漢字仮名交り文学の敍述されるに到った新時代を聯想させると思う。作者不詳ながら、歴史小説として巧妙な表現である。中古中世時代の国文学の中で源氏物語と平家物語とが並称されているのは必ずしも過賞ではない。平家物語巻頭の

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響有り。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。奢れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ（下略）

やはり時代思潮が、こうした作品を完成せしめたのである。「源平盛衰記」や「太平記」の類は、かような時代があって初めて執筆されたものと結論してよい。もとより史述を主眼としながら中世的のムードがいろいろの形で示されている。「奢れる者久しからず、只春の夜の夜の如し」は、作者の人生観の一部を表わしたものに相違ないが、武家闘争の時代、極楽往生を考える浄土宗信仰時代が、平家の没落をかく書かざるを得なかったのである。従って、作者が時代思潮を建設する実例も考えられてよい。

先ず中古時代の女流日記、随筆文学および中世時代に多い紀行関係の詩文を参照して見よう。自分は更級日記の率直な文体を好むものであるが、筆者が少女時代に上総から帰京した前後の描写に

いと暗くなりて三条の宮の西なる処に着きぬ。広々と荒れたる処の、過ぎ来つる山々にも劣らず、大きに恐ろしげなる山木どものやうにて、都のうちとも見えぬ処の様なり。ありもつかず、いみじうもの騒がしけれども、いつしかと思ひし本なれば「物語求めて見せよ、見せよ」と母をせむれば、三条の宮に親族なる人の衛門の命婦とてさふらひける尋ねて、文やりたれば、珍しがりて、喜びて、御前のをおろしたるとて、わざとめでたき草子ども、硯の箱の蓋に入れておこしたり（下略）

とある更級日記の完成（原本の姿に）された年代は不明瞭であるが、この前後の敍述は、殊更後世になって記憶を辿って書いたものとのみは思われない。清少が枕草子を書いた心理についても同様であるが、筆を棄てて茫然として居られなかったのであろう。更級日記の書かれる以前に類似の日記があったかも知れぬが、ともあれ孝標女は自己の体験を些かでも書き残しておきたかったのである。清少納言の行動、筆致については紫式部あたりから面と嘲弄された時もあったらしい。例の名高い一節

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集り侍るに、「少納言よ、香炉峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も忍さる事は知り、歌などにうたへど、思ひこそよらざりつれ。「猶此宮の人々にはさるべきなめり」といふ（二五六段）

後宮に奉侍していた時代の一エピソードとはいえ、やや自負めいた書振りを、周囲の人々は如何ように受取ったことであろうか。ずん

ずんと筆を運ぶ気強さを、出来れば多くの仲間は笑殺しようとしたかもしれない。この恥辱に堪えたところに清少の個性が出ている。しかしその鋭い印象的表象、乃至観察は、奉侍している中宮定子に対しても感激を与えることができた。はっきり経緯はわからぬが、清少はこの書の若干の段を書きあげ中宮に献上したものと思える。これを傍視した他の女官には、清少のやり口を横暴に過ぎると評したものもあったことであろう。しかし、枕草子が国文学の中で随筆の始祖であることは誰も疑わないし、個性を自由に発揮している点も、源氏物語以上に評価するものもある。枕草子が遺されなかったら、方丈記や徒然草もまた書かれなかったかも知れない。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛しらぬも、なほあはれに情ふかし

（下略）

徒然草の中には、この他に非常識のような章句が甚だ多い。矛盾と見られる内容のものが背中合わせしている段などもある。しかし徒然草はそうした妙味によって近世まで却て永く愛読されたものと推されるだろう。

後白河法皇の時代、今様振と云う歌謡が流行し、法皇は特にそれを愛誦されて「梁塵秘抄」を自ら編輯された。巻一の一部と巻二とが現伝されているだけであって、全部の姿を知ることはできないが、和歌と音数を異にし、内容としては法文歌も多いが、概ね民衆の制作による俗歌である。

我等は何して老いぬらん
思へばいとこそあはれなれ
今は西方極楽の
弥陀の誓を念ずべし

この一首の調子を見ても分るように七五を四句かさねて、穏和な韻律を見せている例が多い。民謡調を聯想するが、或は祭などで謡いながら踊った時の歌の一種かも知れない。次は東京行進曲の一首であるが

むかし恋しい銀座の柳
あだな年増を誰が知ろ
ジャズで踊ってリキュルで更けて
明けりやダンサのなみだ雨　（西条八十作）

こうした音調のものは近世、近代を通じて幾百首というように作られたが、郷土民謡の味が主調である。梁塵秘抄の中には、その四行が三行となり、七五音、五五音、乃至七七調というように変った例も見られる。

おもひは陸奥に
恋はするが（駿河を掛けたもの）にかよふなり
見初めざりせばなかなかに
空にわすれてやみなまし

これも梁塵秘抄の中のものであるが、俗歌民謡めいたものが採られている。作者は隠れて知られないがこうした内容のものを新時代の色彩が吹きまくって出てきたものと考えられる。

近世は江戸三百年として、草子作者に西鶴あり、俳人に芭蕉あり、浄瑠璃に近松あり、読本作家に秋成、馬琴あり、その他有名な歌人は一々列挙されぬほど多数出ている。時代の思潮には、元禄時代のような経済膨張が見られ、町人文学時代とさえ呼ばれるに及んだのである。そこで新時代と作家との対立である。異色の浮世草子を作った西鶴には、すでに談林俳諧の影響も存したけれど、ここに「胸算用」の問屋の「寛濶女」の一節を引用すると、

世の定めとて大晦日は闇なる事天の岩戸の神代このかたしれたる事なるに、人みな常の渡世を油断して毎年ひとつの胸算用ちがひ節季を仕廻かね迷惑するは面々覚悟あしき故なり。一日千金に替がたし銭銀なくては越れざる冬と春との諍是借銭の山高ふしてのぼり兼たるほだしそれ〳〵に子といるものに身躰相応の費さし当って目には見えねど年中につもりてはきだめの中へ、すたり行くはま弓まりの糸宵、此外雛の摺鉢われて菖蒲刀の箔の色替り踊たいこをうちやぶり、云々　とある。

「好色一代男」といい「日本永代蔵」といい、極めて鋭利な筆鋒をもって表現している。西鶴について個性と時代性との表われ方を見ると、個性的のものが六、七十パーセント、時代的のものが三、四十パーセント程度になるであろう。要するにその断乎とした勇気によって、極めて特殊的のものを打出したのであった。その他近松系の浄瑠璃といい、三馬系の滑稽小説といい、また一茶や良寛のような畸人などが多数現われて近世文学は爛々と異彩を看せている。それも、人物、個性のあったためで、国文学史の中で、近世文学は最も複雑であり、また時代の思想が背後に押しやられている。もっとも今は、個性的と時代的とを比較してその上下を定めがたいし、ただ研究課題として幕末の歌を考察して見ることにしたい。

近世時代が文化、文政、天保の前後、幕府の崩壊期にさしかかり、日本歴史の中でも、中世の戦国時代以上、諸問題が持ちあがった。その原因の一つには寛政三年（一七九一）の外国船応待令とか、その翌年のロシヤのラクスマン来航や蝦夷問題など外交に関するものが頭著であるが、その裏には天明時代に出た幕府倹約令、寛政時代に見られる出版条令公布など、国民の心を不安にさすものがあった。文芸のジャンルの類も、複雑多様になったが、基本的に国民の心を集結するほどの力なく、漢学、国学関係以外に日記物、随筆物、評論物から各種の草子文学、読本、滑稽物などあり、和歌あり俳句あり、川柳、狂歌等があってその選択に迷うほどである。江戸開幕以来、歌人はますます増加したが、真淵、宣長、千蔭、春海、御杖、良寛、景樹など歌調も多種多様である。それは特に三代集調新古今調、二條派調、革新調すべてに亘っている。即ち、時代を代表するほどの新歌人がなかったのであるが、本論では、その中の「伴林光平」と「平賀元義」との両人の傾向を比較し、個性と時代性との係わるところを指摘することにする。

元義は寛政十二年（一八〇〇）岡山藩の中老、池田勘解由憲成の臣、平賀新兵衛長治（イ、春）の子息のことで、幼名は猪之介、ま

た七歳と称し、祖母の家を継いで興津新吉郎藤原直元と呼ばれた時代もあったという。その他、数度の改名をしている。その生い立は、履歴として明確でないが、かれの家集を綜合するとそのほぼ大様は推知される。自撰の家集らしいものは無いのであるが、加茂真淵を崇拝していたように、その好んだ歌調は時代のものとは別途の行き方をしたもの、あるものは万葉調をとり入れたりしているので、有元稔編の家集の外、(明治三九年十二月廿六日)神田東一もその拾遺を編んでいる。ここに吉備歌人の問題があるが、尾山篤二郎は大正十二年四月十八日更めて元義の家集に「平賀元義歌集」との題名を附して公刊した。解釈や作家年表が附加され、容易に入手し繙くことのできる出版となっている。ただし、岡山出身の正宗敦夫、古泉千樫、井上通泰等から家集に多い旧地名のことを訊き取ったことになっている。なお、羽生永明が、新聞山陽新報に「恋の平賀元義論」を書いているが、その論妥当であって、元義集の歌には、多くの地名と共に「吾妹子」の文字がしばしば出てくる。散文で一代男のようなエロテイクの文学であるに対し、元義の方は詩歌的表現を取った恋歌集と解しても過評ではないだろう。

四月十四日遊三千早瀧一

鵜山の瀧つ白波さにつらふ少女と二人見れど飽かぬかも

愛人の中には遊女もいたらしく、「少女と二人見れど飽かぬかも」というよう、その愛人と会合し風景を看る欣びを歌ったものが多い、彼は、万葉集の影響をうけたものらしく、地名の委しく書かれた題詞、相聞歌の多い点など両者共通する点が認められる。

十一月十九日夜遊二衆遠観一二首

石の上ふりにし妹は咲き匂ふ初花よりもめづらしきかも

妹が家の梅をめでつつ吾居れば在明の月夜雁鳴き渡る

十五日

打見る島のさき不漏妻はあれど君をぞ思ふにくからぬから

これは春の歌から例歌を引いたにすぎないが、次のような発想のものもある。

皆人の得がてにすると君を得て君率寝夜は(イ、「わがぬるよらは」とあり)人な来りそ

愛人を「妹」「吾妹子」「君」「妻」「女」等々、種々の語で詠出しているものの中に

こころなく啼く鳥かも吾妹子に別れのをしきはるの晩

など吾妹子への愛情をまことに素直に詠じている。家集の統計をとれば、女を詠み込んだものが、全数の約半に及ぶであろう。

なお、元義の歌は、幕末における万葉調の特質をよく蔵しているという。当時、県居派や桂園派の歌人の中に、万葉調を憧憬するものが数人あったけれど、真実古今調本位の傾向に反し、万葉調の歌を詠ずるものは二、三人に過ぎなかった。結局、かれは風流という詞に捉われることなく、岡山を中心にして右往左往しての見聞を題材とし、時に応じて自由の表現をしたためである。かつ備州美作にかけ古く神祠の遺っているものが多い。元義は、異性への想を詠み

出していない時は、神社乃至史的旧蹟を歌っている点、類似の歌人をあまり見ない。

天保八年（一八三八）三月十八日自三彦崎一至三長尾村一途中の歌

牛飼の子らにくはせと天地のかみの盛おける麥飯の山

二月二十四日遊二于早瀧一

菅の根の長長し日も見れどあかぬかも瀧姫の（イ、瀧もる）早瀧山を落とす瀧の瀬（旋頭歌）

二十八日自三彦崎一至三途崎一途中二首

吾国は夕立ちすらしひさかたの天の金山雨霧合たり

児島には虹かも所立いなをかも建日方別注連引かすかも

以上の歌について、麦飯山、早瀧、金山、など何れも神々に係わる土地と考えられたものであり、最後に出した建日方別は、古事記に見えるとおり児島の古神名である。かれにおいて吾妹子への愛情は、備州美作に散在する神の祠に対する崇拝心に共通する。地名の類も、判るかぎり題詞に入れているのを見ても、桂園派にこだわらない独自の態度が覗える。それは、古代歌の模倣にすぎないと評せられるかも知れぬが備前、備中、美作を主として、脚の痛みも厭わず、歌道を唯一の生命としている態度は、時代に従順しえなかった結果である。その点唯に奇人であるとか風流人であるとかの評は不充分であって、地方的ではあったが京都、讃岐、出雲に一度旅している。生きる道を一路辿っていった反時代的人物であった。岡翁歌話に元義を批評して「此人婦女子の上には種々の評ありて、狂態を演ぜしと云ふ説あれども、己は幼時の事とて詳しく知らず。されども彼の大酒家の名の如くに此も色情に耽りしのみにはあらで、かの上代の人の更に物を隠すということなきを喜び、その跡を慕ふ心より自分もありし事共隠す事なく云ひしものから、ことごとしく世に聞えしならん」とあるは、彼のありのままの態度を理解し得たものである。ここに歌系を精細に示すことはできないが、所謂春満系とされている在満、真淵、蒼生子、次に真淵門の田安宗武、河津宇万伎、本居宣長、加藤千蔭、村田春海等々の歌風は、時代と云う雰囲気に硬く包まれていたものと云わねばならぬ。

鏡山ゆきに朝日の照るを見てあな面白と歌ひけるかも

この鏡山も、美作勝田郡にある山名の一つである。

その他長歌も相当に詠んでいる。

「皆人はあを老翁といふ此人はあを翁とふ、よしゑやし老翁ともいへよしゑし翁ともいへ黒髪はいまだしらげず白き歯は黒くもならず足すらもいまだなへず口すらもやまずものいふ此足の踏たつ極み此口のものいふかぎり丈夫の心振越し八島国あるき回らひ古の御書押開き御国ぶり説ぞ示さむ事しあらば火にも水にも大君の為にぞ死なむ年は老ぬとも

これは野口隆正などが、元義を平賀老翁と評した由を聞いて、率直に自らの感想を長歌に述べたものであり、表現まことに自由溌達の調子と云わねばならぬ。

次に伴林光平は文化十年播磨（河内ともいう）河内郡道明寺村の

生まれである。生家は寺院で尊光寺といい真宗に属した寺院であった。齢を元義に比べると十二才年下となるが、逝去の年は両人一年の差違あるだけである。通称を十数度変えて使っているところなども元義のやり方に似ている。文政元年（六才）の時、同郡の丹叱村西願寺住職得聞（イ、徳門）の養子となった。時代の影響をうけて文政十年頃武技を練習し、知人大観（近江人）が奈良で因明学を学ぶとい云うので、同伴していったが、真宗の僧侶というのでその聴講は断られた。光平は、奈良の薬師寺に入り、暫く寺僕に甘んじて暮らしていた。その後、郡山の光慶寺に入りいろいろの講筵を聴き修養を続けた。その頃、赤貧に陥り、夜になると読書用の燈も無く闇中に立って時間を過ごしていたのを、付近の搗磨屋伊兵衛が同情し、燈油を買ってかれに与えたという逸話も残っている。それは時代の姿に影響されたものと推定されるが、僧侶として生涯を終ることに満足ができず、人生に対し理想を抱き続けた。因明学を学び朱子学を二十四五才で学ぼうとしたことも、そのためであり、天保九年（一八三九）には、川辺郡伊丹にいた中村良臣が儒学に優れていると聞いて入門して居り、また、因幡人飯田秀雄をも訪ねている。かくて、秀雄のすすめを受け因幡勝宿の加知彌神社の神官の職に一年余就き、秀雄の進言により、当時名高い加納諸平を紀州に訪ねて国学の指導を受けている。光平は、紀伊大和の東西各地を旅し、わが皇祖の御陵が多く廃退した状を見て慨いた。その後、秀雄、諸平などから山陵調査のことを進められ、翌年江戸に上って国学者伴信友を訪問し、その感想を述べている。その際、旅費も無い貧しさのため、幸い、河内狭山藩の北条侯が上京することを聞き一備夫として随行したという。翌年旅費をもらって再び河内に帰国した後、八尾教恩寺で国学を聴衆に説いたこともあり、四月河内陵墓図十七枚を書きあげてこれを旧師の信友に献上した。崩壊した御陵研究には次々に共鳴者が現われてきた。大坂の佐々木春夫の如きもその一人である。時代には弘化、嘉永、安政、万延、文久と年を追うて不安の世相が増してきた。攘夷論がおこり幕府政治への否難が高まってくる。国学についてもっとも関心を抱いた光平は、青年時代から詠歌の才能をも発揮し天保十年ある夜、一夜に計三百首を詠み、これを法隆寺の豊聰殿に納附したこともあるというが、彼の歌は三、四十才時代の闇黒な環境下のものと評せざるを得ない。国学者が和歌を方便視したよう、憂鬱な時代観から己を逃亡さすことができなかったのである。

（野柳）霜枯し野づらの柳うぐひすの来居て鳴くべく萠そめにけり

（春雨）浪の穂はかすみのひまにかつ見えて春雨なびく芦の屋の里

（野辺に出て）薄原やつれし袖のうち上に萠出る春の色を見るかな

これら何れも秀逸である。才あった歌人であることをしみじみと思わしめる。ただし、憂国の精神、陵墓の調査などという光平の心境と歌風とは調和するところなく、和歌は独立的に並行の線を辿って

いると評せざるを得ない。「直毘霊」や「万葉集」の講義をしたこともあるらしいが、「垣内の七草自序」の中に

……かゝれば歌よまんと思はん人先づおのが当世の風格をよく心得て、世の人情に協へらんさまをば歌ひつべきものぞ

と述べているその論は一おう常識とされてよいが彼はやはり理想主義者であり観念論者である。嘉永六年(一八五四)大坂の薩摩堀附近の広教寺で歌会を開催した時、幕府の川路左衛門に面会し、尊王攘夷の説を論じている。しかも彼の遺詠には攘夷を主旨としたテーマはまったく採られていない。光平と詩歌との関係は、やや主と玩弄品との係り合を見せている。万延元年(一八六一)僧家に生まれながら、遂に還俗を決行したが、法隆寺の諸門人(平岡や今村等)と計り中宮寺の宮を党主総裁として、幕府滅亡を企画したのが天誅(イ忠)組事件となった。二月、京都を出立、河内を経て、同月十七日観心寺に到着、後村上帝御陵と楠正成の首塚を奉拝する。挙兵の趣味に讃同して集まった郷党の総数計千二百に及んだという。本営を十津川天の辻に定め、光平は党派の記録方に指命された。しかしこの企画は效を示さず、京町奉行軍のため敗戦の結果となり農兵たちも紀伊に逃げ去った。光平はその後九日南下して奥鷲家村で後から到着した一行に合し熊野神社の祭に参加させ祝詞を誦するというようなこともあった。しかし謀反の故に獄に入れられ斬首をうけて終ったのである。彼の遺著には「南山蹈雲録」のあることは有名であるが、その他「詠歌百首」「詠歌大概」「和歌天爾遠波書取」など、歌論に関した著書もある。略歴で述べたよう、奇人と云われた元義に比べ、幕末志士らしく特殊の生涯を送った人物である。生涯は不幸に終ったが、時代精神、時の力に掩いかぶされて、余儀なかった。彼の歌には

住居こそ八畳敷にたらねども眼玉許りは狸も閉口

と云う狂歌体のものも二、三あるけれど、彼はこうした特異さを推し進めることができず、結局今見る家集の範囲を脱却することができなかったのである。しかし幕末における退功によって王政復古の後、(明治二十四年)従四位を贈られ靖国神社に合祀される名誉をうけた。脚を思って、晩年外出中、倒れて死んだ平賀元義の運命に比較して、多くの共通点を遺している。時代環境に支配されると否とに人としての優劣は決しがたいが、自己がその何れであるか、如何なる立場にあったかということを一応自覚しておくこと、われわれ現代人の良識というべきものであろう。